日本記号学会第45回大会個人研究発表・要旨

2025年7月5日・6日

情報科学芸術大学院大学［IAMAS］

主体なしの記号？：パース，AI，ベイトソン

西田　洋平（東海大学）

発表要旨：

C. S. パースの記号論には、自然的事象を含むあらゆる事象を記号過程として捉える汎記号論的側面があることは、一般に認められるだろう。「宇宙論的」とも言われる彼の記号論の延長線上に、動物記号論や生命記号論のような記号論の自然化とでも呼ぶべき多数の試みがなされてきたという事実もある。

そうした理解によれば、記号はその第一義的な解釈者と思われる人間を離れ、自然に内在し、偏在するものとして位置付けられることになる。動物や生命だけではない。生命発生以前にも原初的な記号現象が存在したと捉える傾向は、ホフマイヤーのような生命記号論者においても見られる。ベイトソンの情報観も、これにかなり類似している。そしてそうした主体なしの記号観は、近年のAIのような無機的システムにおける情報処理の成功とも通じているように見える。

しかし、主体なしの記号現象とは、いったい何だろうか。パースのように、最初に記号ありきと想定しても良いが、それはそう信じることによって成り立つ、まさに形而上学であって、根拠なくそう想定する観察者とセットである。本発表では、大規模言語モデルの新しい理解の可能性を示している集合的予測符号化（CPC）理論との関係も併せて、この問題を考えてみたい。

Bateson, G., 1970, *Steps to an ecology of mind*, (佐藤良明 訳, 2000,『精神の生態学』改訂第２版, 新思索社).

Brier, S., 2008, *Cybersemiotics: Why Information Is Not Enough!*, University of Toronto Press.

Hoffmeyer, J., (Danish version 1993), Haveland, B. J. (Trans.), 1996, *Signs of Meaning in the Universe*, Indiana University Press, (松野孝一郎, 高原美規 訳, 1999,『生命記号論: 宇宙の意味と表象』, 青土社).

伊藤邦武, 2006,『パースの宇宙論』, 岩波書店.

椋本輔, 2023,「コミュニケーションのデザイン: デジタル情報に意味を見出す観察者」,『未来社会と「意味」の境界: 記号創発システム論／ネオ・サイバネティクス／プラグマティズム』, 勁草書房, pp.138-150.

西田洋平, 2010,「ネオ・サイバネティクスと生命記号論: その交点における情報論／生命論」,『思想』, 第1035号, pp.115-130.

Peirce, C. S., (米盛裕二, 内田種臣, 遠藤弘 編訳, 1985-1986,『パース著作集』, 勁草書房, from (Hartshorne, C., Weiss, P. and Burks, A. W. (Eds.), 1931-58, *Collected Papers of Charles Sanders Peirce: Vol.1-8*, The Belknap Press of Harvard University Press)).

谷口忠大, 2024,「集合的予測符号化に基づく言語と認知のダイナミクス: 記号創発ロボティクスの新展開に向けて」,『認知科学』, 第31巻, 第1号, pp.186-204.